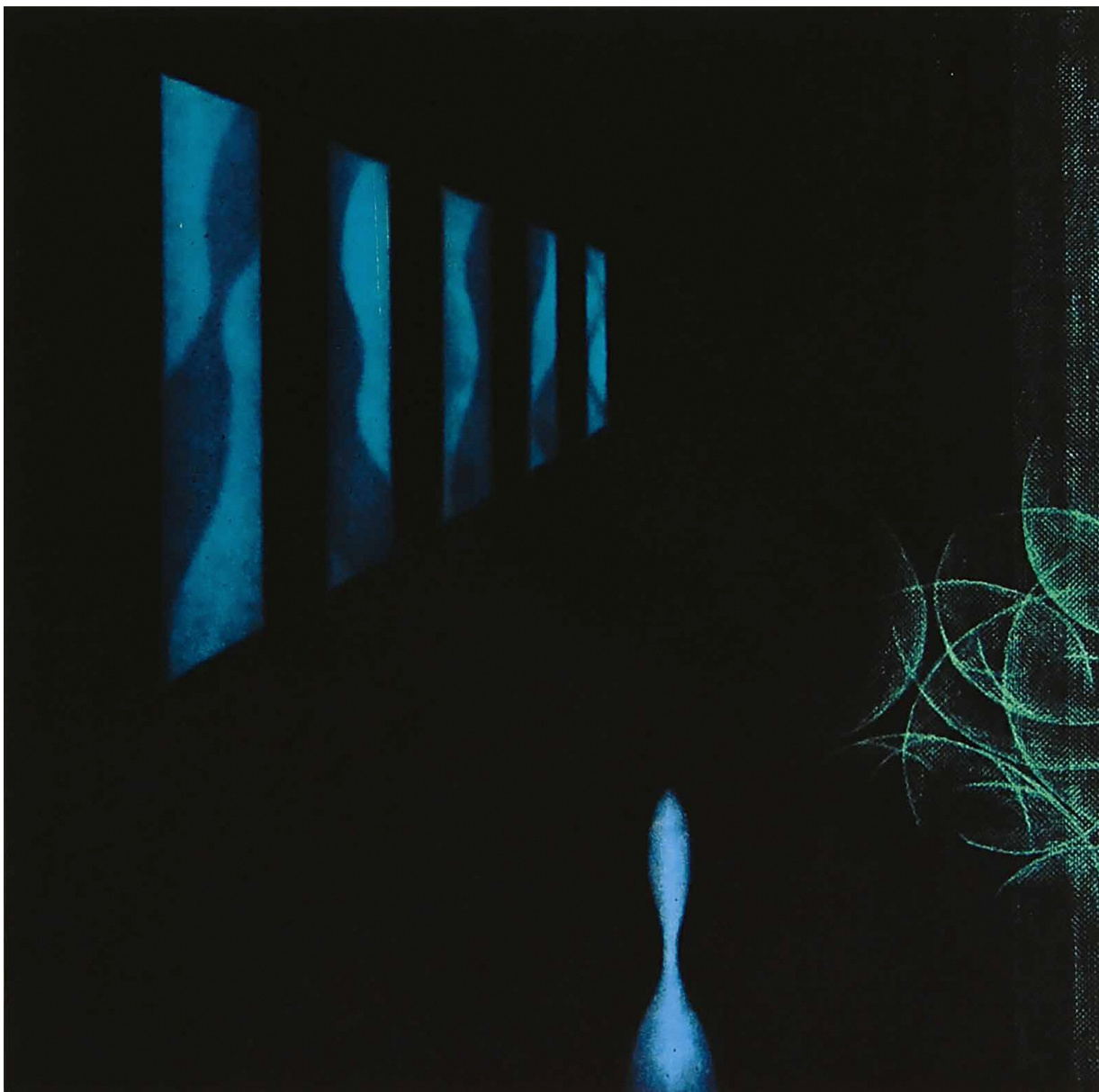


アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



二見彰一
《心の部屋》
一九七二（昭和四六）年
二六・二×二六・五cm
紙、アクアチント、ソフトグラインドエッチング

二見の版画作品は、その澄んだブルーに特徴がある。彼独自の技法によって生み出される、夜空のような深みを持つ色調の中に、朧げな形態が、しかしすっきりと浮かびあがる。彼の作品には、絵解き出来るような要素が、あまりない。この作品にも、画面の左手前から奥へと続く、何か平面のようなものや、不思議な人影らしきもの等は見えるが、この作品の「意味」を説明してくれそうもない。作者は語る。「画は理解しようとするのではなく、音楽を聴くときのように自然に感動を呼び起こすものだ、と私は思います」。このような作品を前にする時、私たちは、声高な説明ではなく、心を落ち着け、静かに耳を澄ますことを求められているのではないだろうか。

（上席学芸員 新田建史）

No.
146
2022年度 | 夏 |

排除と包摂——八十三年前

館長 木下直之

「排除と包摂」の話をもう少し続けたいと思ったのは、今から八十三年前、一九三九年（昭和十四）に開かれた第一回聖戦美術展（陸軍美術協会と朝日新聞社が主催）に、「白衣の勇士」という部門が立てられたことを知ったからです。

展覧会は五部構成でした。第一部「戦線」、第二部「白衣の勇士」、第三部「占拠地」、第四部「銃後」、第五部「スケッチ集」。最終部門を除けば、あとは戦争の空間的な配置に従っています。

「白衣の勇士」とは傷痍軍人のこと、白衣は病院着であり、占拠地・内地間わず病院に収容され治療を受けた将兵でしたから、彼らはまさしく戦線と銃後の間に存在していました。いまだ軍籍にあり、治療すれば戦線に復帰しなければなりません。それが無理だと判断され帰郷を許されたところで、あくまでも「再起奉公」が求められました。ちなみに「白衣」は「はくい」と読んでしまいがちですが、どうやら「び

やくえ」だったようです。動かぬ証拠は同名の歌謡曲「白衣の勇士」（ポール、一九三八年）、「びやくえ」と歌う東海林太郎の声を YouTube で聴くことができます。それに「白衣観音」も「びやくえ」ですよ。

傷痍軍人がいつからそう呼ばれるようになったかを調べているのですが、聖戦美術展からそれほどさかのぼりません。一九三七年に刊行された『感謝の心もて白衣の勇士に捧ぐ』（白衣の勇士慰問委員会）が、見つけた最初の本です。その後、急速に普及します。

そもそも、これは戦場で傷ついた将兵をどう呼ぶのかという問題と連動していました。日露戦争のころの呼称「廃兵」が「傷兵」や「傷病兵」に入れ替わり（三四年に廃病院が傷兵院と改称）、三〇年代末になると「傷痍軍人」が定着します。

日中戦争の時代でした。戦線が拡大し、長期化するとともに傷痍軍人が激増しますが（現在のウクライナの戦火

が頭をよぎります）、簡単に戦力外とするわけにはいけません。だから、「廃人」を連想させる「廃兵」という表現を避けたのです。さらに「白衣の勇士」と讃え、感謝を捧げる言葉まで必要になりました。

では、聖戦美術展の「白衣の勇士」部門には何が展示されたのでしょうか。端的に言えば、傷痍軍人を描いた絵と傷痍軍人が描いた絵です。彫刻も数点ありました。言い換えれば、玄人の絵と素人の絵が同居していたのです。

陸軍美術協会といえば大層に聞こえますが、会長だけは軍人（松井石根陸軍大将）が務めたものの、副会長藤島武二以下、鶴田吾郎、石井柏亭、中村研一ら当代の画家が名を連ね、審査に当たりました。

美術展では審査という名の「排除」が行われるわけですが、傷痍軍人の出品に対しては入選基準を大幅に緩めたようです。それどころか、締切に遅れてもまだ受け付けました。話題をつく

り、文化事業を盛り上げようとする朝日新聞社の魂胆がよく見えます。展覧会図録の解説には、作品ではなく作者を語るもの、さらにいえば美談が多く、新聞記者が書いたのではないかと思われま

す。もちろん、絵心のある傷痍軍人はいました。しかし、彼らに期待されたものは、表現ではなく経験でした。絵は多少拙くとも、「戦線」にあつたという経験は得難いものであり、「銃後」から出かけていった従軍画家たちにはとうてい太刀打できないものでした。それを新聞社は求め、広く社会に報じたのです。

これが八十三年前の論理に基づく「包摂」です。ところが、敗戦後に「白衣の勇士」は一転して国家の保護を失い、街頭に立つ「白衣募金者」と成り果てます。すると、その多くがニセ者であるという理由で、日本傷痍軍人会は撲滅運動に乗り出すのです。なんと一九六四年のオリンピック東京大会までを目標に、社会からの「排除」を目論んだのでした。

この話は終わりそうにありませんから、場所を当館ウェブサイトに開設した「ノック無用—館長室だより、ただしトキドキ行方不明」に移します。

静岡県立美術館 デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブの魅力

この四月から静岡県立美術館デジタルアーカイブの公開が始まりました。静岡県立美術館デジタルアーカイブとは当館ウェブサイトで上から閲覧できる収蔵品などを対象とした検索システム、および高精細画像、バーチャルリアリティ（以下VR）、動画などの総称です。美術館・博物館に対し、オンライン上での所蔵品などに関する情報の発信が求められる中、当館でも約一年をかけて公開に向けた作業を進めてきました。

従来の検索システムでは収蔵品のみが対象でしたが、今回新たに、美術関連の専門書や全国各地の美術館が発行した図録をはじめとする当館の蔵書、および開

館以来各地の画廊や作家から当館宛に送付され、蓄積されてきた案内状類（「現代美術関連資料」という名称で公開）が検索対象に加まりました。これらの情報を横断検索することにより、作家や作品について多面的な情報を得ることも可能になっています。

そして、当館コレクションの白眉、池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》を細かく分割撮影し、一枚に合成した高精細画像を製作しました。作品の部分を自在に拡大し、大雅の洗練された筆技を存分にお楽しみいただくことができます。

更に、オーギュスト・ロダン畢生の大作《地獄の門》の実物を計測して製作されたVRも公開しています。スマートフォンやパソコンで操作していただくこと

で、様々な角度から眺めることが可能です。その巨大さゆえ、展示室の実物では見えにくい部分の造形も、手に取るようにご覧いただけます。

（主任学芸員 浦澤倫太郎）

スペシャル動画の公開

そのほか、このデジタルアーカイブの公開を記念して、当館の収蔵作家である、中村宏および森村泰昌に関するスペシャル動画を制作し、公開しています。

中村宏は一九三二年に浜松市に生まれ、一九五一年に大学進学のため上京の後、一九五〇年代に社会的事件を描いた「ルポルタージュ絵画」を代表する一人として活動しました。東京・立川の米軍砂川基地拡張反対闘争を描いた一九五五

当館学芸員が作家にインタビューを行った記録を、前編・後編（約三十分）に編集したものです。前編では、代表作《砂川五番》や、「モンタージュ絵画」期を代表する《階段にて》（一九六〇年）などについて、後編では、一九六〇年代の中村のアイコンともいえる制服を着た少女モチーフや、望遠鏡からのぞいたイメージを描いた作品、および近作について、興味深い話をうかがっています。

また、森村泰昌は、美術史上の名画に作者自身がなりきり、作品の中に入るスタイルを確立し、国内外で高い評価を得ている作家です。当館は一九九〇年に開催した『静物 ことばなき物たちの祭典』展で、セザンヌの静物画をモチーフにした《批評とその愛人》を紹介したことを機に、同作品を収蔵しています。動画は、一九八〇年代から交流のある森村泰昌氏と当館館長の木下直之が、《批評とその愛人》とそのマケットを話題に対談を行った記録を、前後編三十分程度に編集したものです。前編では、森村がスタイルを確立する一九八〇年代末前後の制作背景について、後半では、完成作として発表する写真を撮影するために作られるマケットを話題に、木下館長が関心を持つ近代以前の見世物と、森村作品に流れる、美術や芸術とは呼ばれない「つくりもの」の血筋との接点を探る話題が繰り広げられます。

（上席学芸員 川谷承子）



デジタルアーカイブポータルページ
<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/archive/>

年制作の《砂川五番》（東京都現代美術館所蔵）は、この時期を代表する一点です。以来、複数のシリーズを展開して現在まで約七十年間にわたり、絵画制作を続けています。当館ではこの中村の作品九点を収蔵しています。動画は、昨冬、

絶景を描く —江戸時代の風景表現—

2022年9月10日(土)～10月23日(日)

前期：9月10日(土)～10月2日(日)

後期：10月4日(火)～10月23日(日)

日本列島の津々浦々に点在する素晴らしい景色は、古くから人々の目を楽しませ、絵に描かれてきました。この展覧会では、当館および個人のコレクションなどから、各地の絶景を描いた江戸時代の絵画を中心に、約五〇点の作品を展示します。

本展では会場をいくつかのセクションに分けて、様々な絶景の魅力を読み解きます。冒頭では、古くから和歌に詠まれてきた名所を題材にした作例をご覧ください。続いて、関西の南画家たちによって試みられた各地の名勝を理想化する表現、関東の画家たちが中心となって追及した迫真的表現な

どに注目します。会場の最後では、作品の題材となった風景が辿った歴史にも迫り、表現の展開を、これまでの研究とは異なる観点から検証します。

次に、本展のみどころをご紹介します。

まずは当館コレクションを代表する名品の数々を一望できる点にご注目下さい。各展示室には、江戸時代に各地の絶景を描く珠玉の作品が集結します。なかでも富士山を描いた図は、江戸狩野派から関西画壇の諸派まで様々な画家たちによる作品が展示されます。富士山のある静岡県に所在する当館が、開館以来収集を続けてきた成果をご覧ください。

そして、風景表現の特徴を比較できる点もみどころです。会場内の一室には、原在正《富士山図巻》(個人蔵、図1)と歌川広重《不二三十六景》(当館蔵、図2)という、様々な場所から眺めた富士山を描いた二つの大作を展示します。両作品を比べてみると、富士山を望むことができる場所が広い範囲に存在していたことが体感できます。横幅を自由に設定できる画巻と、寸法が一定である中判錦絵というそれぞれの画面形状を活かした構図の工夫にもご注目ください。

最後になりますが、実際の風景がど

のように絵画化されたのかを検証することも、本展の試みの一つです。東海道沿いの富士見の名所をはじめ、宮島など日本三景にも選ばれるおなじみの景勝地、更には遙か八丈島を含む伊豆諸島まで、出展作品の題材となった場所は、全国各地に及びます。このうちの一部の作品については、描かれた風景に関する現地調査の結果も交え、画家がその風景をどのような視点で捉え、いかなる演出を加えて描いたのかについてもご覧いただけます。

このように本展では、様々な切り口で江戸時代の風景表現の魅力に迫



図1 原在正《富士山図巻》第五巻より「駿州富士河」個人蔵



図2 歌川広重《不二三十六景》より「駿河不二川」当館蔵 ※後期展示

ります。江戸絵画に興味をお持ちの方はもちろんのこと、旅行や登山が好きな方にもお楽しみいただけることでしょう。画家たちが追い求めた絶景を巡る旅をご堪能ください。

会期中は館長・木下直之による講演会に加え、担当学芸員によるフロアレクチャー、そして出品作品に関連した実技系イベントなどの開催も予定しています。詳細は当館ウェブサイトや館内はじめ各所に配架するチラシなどでご確認ください。

(主任学芸員 浦澤倫太郎)

※会期中、一部展示替えを行います。

2022年度収蔵品展 絶景考Ⅰ／絶景考Ⅱ

2022年7月20日(水)～9月19日(月・祝)
2022年9月21日(水)～11月20日(日)

西洋風景画の収蔵品を最後にまとめご覧いただいたのは二〇一九年度の冬、新型コロナウイルス感染症で社会が一変する直前でした。画家たちは、移動をすることで新しい風景を見出し、記録し、その美しさを場所や時代を超えて伝播させてきましたが、自由な移動が当たり前ではなくなった今、当館コレクションも幾分異なって見えてきます。コロナ収束後の社会にも思いをはせれば、環境負荷の大きい移動手段で各地の「絶景」を旅することは、必ずしも望ましい風景の楽しみ方ではなく、なくなっていく可能性もあります。

本展は、そうした現状を踏まえつつ、「絶景」をキーワードに西洋の風景画をあらためて見直そうという試みです。第Ⅰ部では、一七世紀から一九世紀中頃までに描かれた作例を、風景画の歴史をなぞりながらご覧いただきます。

「絶景」はしばしば「絵のような」と評されることがありますが、画家たちが「絵になる」と考えた眺めは、必ずしも今日われわれが「絶景」と呼ぶものとは一致するわけではありません。例えば、オランダの画家ヤン・ファン・ホイエンは、ライン河越しに眺めたレーネンの街を抑制された色調で描き、穏やかな詩情を醸し出しています(図1)。ここには、二〇一四年頃の絶景ブームに次いで流行したキーワード、「映え」とは異なった美しさがあります。

ホイエンと同時代にイタリアで活躍したクロード・ロランは、西洋風景画と「絶景」の距離を考える上で鍵となる画家です。どこでもない理想の風景を描き出した彼の作品も、やはり、今日、具体的な旅の目的地として喧伝される各地の「絶景」とは性質を異にしています。しかし、クロードの絵のような眺めを現実の自然に見出そうとする流行が、各国、各地域の独自の風景とその美に目を向けるきっかけを生んだと

すれば、絶景ブームの端緒がそこに含まれていたとも言えるでしょう。

第Ⅱ部では、近代以降に描かれたフランス各地の風景画をご覧いただきます。印象派以後、描かれた風景が、デフォルメや激しい色彩により現実から距離をとる一方で、具体的な土地や風土が画家の靈感源となり続けたことは極めて興味深いものです。シニャックが好んで描いた陽光眩しい南フランスや、ゴッギャンがその素朴な自然と風俗に関心を寄せたブルターニュなど、当館所蔵品にもそうした作例を見出すことができます。

日本人が描いた作品にも注目します。清水登之の《セーヌ河畔》(図2)には、ユネスコ世界遺産の登録要件となっているポンヌフ橋やルーヴル美術



図1 ヤン・ファン・ホイエン《レーネン、ライン河越しの眺め》1648年 当館蔵

館が描かれています。画家の主眼は散歩や釣りに興じる人々の営みにあるのかもしれませんが、また、藤田嗣治や佐伯祐三の作品には、ランドマークがもつ華やかさとは正反対の裏ぶれたパリの風情が描かれています。

こうした作例のように、画家が自身の内面を投影することのできる眺めを独自の視点で選り出すようになったとき、その風景がもはや「絶景」と遠く隔たったものであることは言うまでもありません。印象派の描いた風景のように、これらがいずれ「絶景」の仲間入りを果たすこともあるのでしょうか。それが分かるのはまだまだ先になりそうですが、本展が、江戸時代の風景表現の魅力に迫る「絶景を描く」展の理解を深めるとともに、鑑賞者の皆様の絶景観をいま一度再考する機会となれば幸いです。(主任学芸員 貴家映子)

※各会期中、一部展示替えを行います。

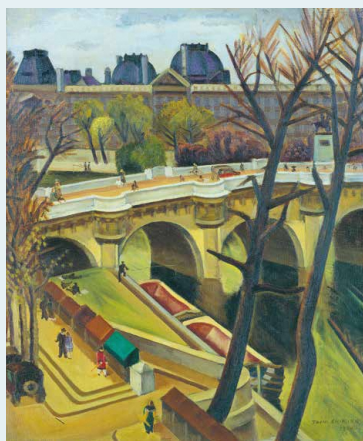


図2 清水登之《セーヌ河畔》1924年 当館蔵

令和2年度収蔵作品 小栗哲郎《龍爪山下の群落》について

上席学芸員 泰井 良

小栗哲郎はなかなか燃えぬ薪のやうな男である。他の仲間とは直ぐ火を呼び景氣よく燃えるのに彼の薪にはなかなか火がつかぬ。

この言葉は、小栗哲郎（一九〇四―二〇〇〇・明治三七―平成十二年）の師ともいえる画家・中川一政（一八九三―一九九一・明治二六―平成三年）が、「小栗哲郎第一回作品展覧會に際して」（昭和十年九月）の中で語ったものである。小栗哲郎三二歳のことである。「なかなか燃えぬ薪のやうな男」とは、言い得て妙であり、また実に含蓄のある言葉でもある。中川は続けて、こうも述べている。

小栗哲郎がなかなか燃えなかつた所以のものは輕率に美術を見る事が出来なかつたからである。彼は他を重んじて併せて自分をも重んじたものである。他の杉の葉が景氣よく燃えつくして亡びた時に、小栗哲郎の薪は漸く燃え出したのである。其れは漸く此三、四年の事である。

中川一政に言わせれば、小栗哲郎は、遅咲きの桜、大器晩成の画家ということであろうか。確かに、小栗は、享年九六歳と長寿であり、八〇歳を過ぎてからも、肉体的にも精神的にも衰えを知らず、作品を制作し続けている。そして大器晩成というだけではなく、周りの潮流や時流に流されることなく、自己の表現を寡黙に追求する芸術

的精神の持ち主であるともいえる。

画家には、様々なタイプがある。ファン・ゴッホや佐伯祐三のように早熟の天才で短命の画家もいれば、あるいは五姓田義松のように、やはり早熟の天才ではあったが、晩年は不遇に見舞われた画家もいる。また黒田清輝のように、若い頃から時代精神を担い、ひたすら我が国の芸術・文化に寄与した画家もいた。

さて静岡県立美術館では、二〇二〇（令和二）年度に、小栗哲郎の晩年の秀作と言つてもよい、八七歳の時の作品《龍爪山下の群落》（図1）を、画家と同じ写真派協會で活動をするなど、親交の深かつた鍋田卓志氏からのご寄贈により収蔵した。本作は、小栗が長く居住していた静岡市にある竜爪山とその周辺の風景を描いたものである。

当館には、すでに《夕陽》（一九三四（昭和九）年・第十一回春陽会展出品作）、《裏のみかん山》（一九六八（昭和四三）年頃）の二作品が収蔵されていた。本作（一九九一（平成三）年）の収蔵により、小栗の画業の前期・中期・後期における優品を所蔵することができた。

《夕陽》は、現在も静岡市内でテラーを営み、もともとは旧幕臣として徳川家に従つて、静岡に移住した士族の末裔の方からのご寄贈である。収蔵当初、本作は、小栗がかつて下宿していた静岡県菊川市付近の風景をモチーフとした作品であると考えられていたが、「第十二回春陽会展覧會

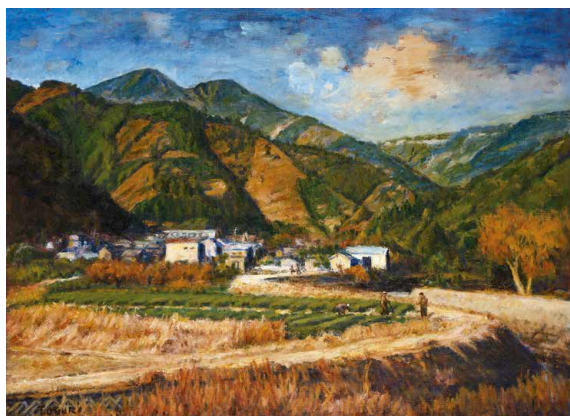


図1 小栗哲郎《龍爪山下の群落》キャンヴァス、油彩、72.7×100.0cm

目録」など様々な文献等の調査によって、現在の富士市（旧富士川町）の松野で制作された作品であることが確認できた。

《裏のみかん山》は、画業中期の作品であり、山肌をクロージアアップして捉える独自の作風で、この時期の小栗に特徴的な作風である。

このように、小栗のそれぞれの時期の特徴ある作品が収蔵されたことで、小栗哲郎という画家の作画活動をある程度概観できるようになり、そのことは、当館にとって大変意義深いことといえる。

本作の主題となっている竜爪山（画面奥に並んでいる山）は、現在の静岡市葵区にある身延山地の山で、古くから信仰の山として登山する人も多い。北側の薬師岳（一〇

五一m)と南側の文殊岳(二〇四一m)の二つの峰からなる双耳峰である。画面奥から右側に蛇行して流れる川は、長尾川である。深緑色の山々と畑の淡い緑が鮮やかで、澄み切った青空と褐色の大地が対比されている。畑の緑とすでに収穫された積藁が描かれ、画面中央には、農作業に従事する三人の人々と、遠景には元氣よく駆走する二人の子供の姿が見られる。

これら牧歌的な田園風景の一方で、手前の山肌の一部には木が無く、土が露出している。実際、瀬名地域は、一九九一(平成三)年頃から、急速に山地の開拓や田畑の宅地化が進んでおり、都市化の影が忍び寄っている様子が本作からも窺える。

筆者は、本作の収蔵に際し、モチーフとなった場所を訪れてみた。この場所は、竜爪街道を沿上、平山方面に向けて北上した場所に位置する長閑な山間地である。筆者は静岡県に赴任した当初この地に居住しており、とても懐かしい場所でもある。

画面の裏面(写真1)を見てみよう。その一つである右端のラベルには「69春陽展」という文字が書かれており、このラベルには右から本作の題名/作者名/作者の住所が記されている。小栗哲郎は、本作をどこ



写真1 第69回春陽展の出品ラベル

で描いたのであろうか。

このことを確かめるため、春陽会会員名簿で、小栗哲郎の住所の変遷をたどった。一九九一(平成三)年の第六八回春陽展画集掲載の春陽会会員名簿までは、小栗の住所は「静岡市大和田78-15」となっており、その翌年一九九二年の第六九回春陽展画集掲載の会員名簿から「厚木市三田1179-12」となっている。第六九回春陽展(於・東京都美術館)は、一九九二年四月二三日から五月七日の間に開催されているので、小栗哲郎は、本作をこの一九九一(平成三)年の秋頃に静岡市瀬名の現地で描き、その後、転居先の神奈川県厚木市の画室で仕上げを行って、春陽展に出品したものと推察できる。このことは、小栗哲郎の長男である小栗悠嗣氏にも確認しており、そのうえで悠嗣氏は「父は、どんな作品でも、必ず一度は現地に赴き、画架(イーゼル)を立てて制作をしていた。」と証言している。またこのことは、常葉美術館 開館十五周年記念「近代日本美術を築いた巨匠」展図録にも、本作の制作年が、一九九一(平成三)年と記されていることも合致する。

それゆえ本作は、現場制作にもとづいて、秋の景色を実景に忠実に捉えたものである。小栗の制作姿勢である風景を目前にした堅実な描写は健在であるとともに、風景の中に鋭く時代の状況を捉え、描き出した作品と言える。

最後に中川一政が一九四三(昭和十八)

年に静岡で開催された小栗哲郎油絵作品頒布会に際し述べた言葉を紹介することとしたい。

小栗哲郎は生得の卑下心を持つてゐる。これは彼の美しい徳であるが、彼は人に對して自分の権利を主張することを忘れて自分の義務のみを感じてゐるやうに見える。此畫會を執行するに就ても随分考へぬいたやうだ。

然し畫かきは飽くまで畫で立ち畫で食ふべきである。その畫家が世間に、文化に貢獻してゐる限りその力量だけは世間が金を使はしてくれと信じる。

小栗哲郎の存在は今や只の地方的存在ではない。しかし静岡縣から出た畫家といふ意味で此畫家に静岡縣下諸賢の親しき御助力を御願ひする次第であります。

「人に對して自分の権利を主張することを忘れて自分の義務のみを感じてゐる」という一文は、小栗哲郎の画家としての信念を言い表しているように思われる。すなわち、小栗哲郎は、師ともいえる中川一政から、風景と真摯に向き合い、実景に即した、てらいのない風景画を制作する画家としての姿勢を学んだ。

小栗哲郎は、生涯、変わることなく、風景画家であり、その作風には変遷はあるものの、制作姿勢は一貫しており、自己の風景と真摯に向き合う精神は、彼の矜持ともいえるものである。



本の窓
 フリップ・マティザック著、安原和見訳
 『古代ローマ旅行ガイド 一日5デナリで行く』
 筑摩書房ちくま学芸文庫 二〇一八年

古代ローマにタイムトラベルできるとしたら、見るべき名所は？ お勧めのみやげや食べ物は？ そんな質問にお答えするのが、このガイドブックです。豊富な図版や豆知識、役に立つラテン語会話などがついて、西暦二百年頃の都市ローマに私たちを誘います。副題にある「デナリ」とは、古代ローマの基準通貨(銀貨)のこと。現代の換算価値は不明ですが、マティザックによると5デナリでパン二十斤(十斤)、また歴史家タキトゥスによると近衛兵二日半分の賃金の賃金に相当するそうです。なお、同著者による本書の姉妹編『古代アテネ旅行ガイド 一日5ドラクマで行く』、ちょっと趣向を変えた『古代ローマ帝国軍 非公式マニュアル』もお勧めです。

(上席学芸員 南美幸)

美術館ではたらく

副館長 長澤由哉

この四月に、副館長として着任しました。どうぞよろしく申し上げます。県立美術館には、何度か展覧会に足を運んでいます。地方行政に携わる者として、美術館に勤務する機会は、滅多にないことですので、この縁を大切にしていきたいと思っています。

当美術館は、政令市にありながら、森に囲まれた丘陵に位置しているため、静謐な空気感に包まれており、訪れるたびに、心地よさを感じていました。草花を眺め、鳥のさえずりを聞きながらの通勤は、昨年度まで、三十年近く、県庁に勤務していたことを考えると、とても新鮮な気分です。新緑の季節が過ぎ、今は、暑さを凌ぐため、木陰を求めながら、歩を進めています。季節の移り変わりも、また楽しみでありあります。

約半年間の改修工事を経て、当美術館が再始動するに当たり、「大展示室展」が開



久し振りに訪れた展覧会の会場にて

催されました。美術館の機能、いわゆる「ウラ」側に焦点を当て、作品展示に欠かせないガラスケースや移動壁を主役に据えたほか、照明の光源や照度の違いによる作品の見え方の変化など、安全かつ快適に作品をご覧いただくための様々な工夫を紹介しました。美術館や博物館のバックヤードを取材したテレビ番組も放送されていますが、こうした試みが広がり、美術館、そして作品への理解がさらに進むことを期待しています。

また、美術館の運営には、学芸員をはじめとした職員、監視や施設管理のスタッフ、ボランティア、友の会の皆さんなど、多くの方々が、日々、熱い思いを持って携わっています。美術館に勤務して、美術館を支える人やモノなど様々な「ウラ」を知り、美術館の奥深さを実感しているところです。

先日、コロナ禍で封印していた展覧会に久し振りに出かけてみました。作品の鑑賞に加え、スタッフの動きや展示室の壁の配置、色使いに目が向くなど、今までとは随分見方が変わってきたと感じています。県立美術館では、これから注目の展覧会が目白押しです。「ウラ」方として、「オモテ」が今まで以上に輝くように、努めてまいります。

2022年度収藏品展・移動展のご案内

[収藏品展]

新収藏品展

7月18日(月・祝)まで

絶景考Ⅰ

7月20日(水)～9月19日(月・祝)

絶景考Ⅱ

9月21日(水)～11月20日(日)

《輞川図巻》修理後初公開

静岡県・浙江省友好提携40周年記念

「輞川図と蘭亭曲水図」

11月22日(火)～2023年1月9日(月・祝)

光—The Light

2023年2月14日(火)～4月9日(日)

[移動美術展]

会場 富士市文化会館ロゼシアター

会期 11月19日(土)～11月27日(日)

※展覧会名、開催期間は、いずれも予定であり、変更となる場合があります。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)

休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767

学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

友の会のご案内

入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。